

「嫌な経験」の語りにおける笑い

| | |
|-----|---|
| 著者 | 臼田 泰如 |
| 雑誌名 | 言語資源活用ワークショップ発表論文集 |
| 巻 | 5 |
| ページ | 348-356 |
| 発行年 | 2020 |
| URL | http://doi.org/10.15084/00003174 |

「嫌な経験」の語りにおける笑い

白田 泰如 (国立国語研究所音声言語研究領域) *

Laughter in tellings of complaints

Yasuyuki Usuda (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

要旨

本研究では、日常生活においてしばしば見られる、誰かが「嫌な経験」について語ることに
いて、特にその語りの聴き手が笑う場合があることに着目する。「嫌な経験」について話すこと
は complaint と呼ばれるが、complaint に対しては笑ったりせずに共感的反応を示すことが協
調的なふるまいになると考えられ、先行研究でもそのように指摘されている。しかし、本研究
が扱うのは、complaint の語りのさなかに、あくまで協調的なふるまいとして笑いが起こって
いるように見える事例である。分析の結果、次のことを明らかにした。complaint の語りにお
いて、語り手は聴き手が笑うのを適切になるよう発話をデザインし、それについて聴き手が笑
うことがあるひとつの連鎖上の位置として、語り手の不満のエビデンスとなる事例を提示した
直後がある。この位置においては事例が「笑えるもの」として提示され、それについて笑うこ
とで、不満そのものを笑うのではなく、そのエビデンスとなる出来事をともにおかしなもの
として扱うということが可能になっている。これは相互に協調的なふるまいであり、complaint
の語りを共同で協調的に組み立てる方法になっていると考えられる。

1. はじめに

日常生活を送る中で、我々はしばしば、「嫌な経験」について自ら語ったり、誰かが語ったり
する事態に遭遇する。こうした語りは日常的な語彙において「愚痴」と呼ばれることがあるほ
か、会話の研究においては complaints と呼ばれる。complaints を観察していると、少なくと
も日本語においては、しばしば語りの最中に語り手ないし聴き手による笑いが起こっている
ことに気づく。本研究では、このような complaints における笑いが、参与者によってなにを達
成する手続きになっているのかについて分析する。

2. 先行研究

「嫌な経験」、すなわち complaints とは、誰かに帰責することのできる問題についての不満
の語りを指す (Heinemann and Traverso 2009, Sidnell and Stivers 2012:360)。また、「トラ
ブルについての語り troubles-telling」と呼ばれる、自らが直面する問題について語るふるまい
があり (Jefferson 1988, Jefferson and Lee 1992)、しばしば complaint と区別されずに参照さ
れる (Holt 2012)。

* usuda@ninjal.ac.jp

本研究で扱う, complaint における笑いについては Holt (2012) による分析がある。Holt (2012) は complaint の語りにおける聴き手の笑いについて分析しており, 以下のように述べている。

In the extracts analyzed here, recipients produce laughter to turns that are adding to an in-progress complaint. These laugh responses do not fully affiliate with the complaint in that they display a discordant stance, and they do not fully align in that they do not add to the development of the complaint. Instead, they are recurrently somewhat disengaged and termination relevant.

(Holt 2012:431)

Holt (2012) において分析されている, “somewhat disengaged and termination relevant” な, complaint における笑いとは, たとえば以下のようなものである。

データ 1 Holt:SO88(II):2:8:8 (ごく短く抜粋)

- 8 Les That's a bit'v'n imposition though isn't it?
 9 (0.3)
 10 Mum What ↑dear?
 11 Les .hhhh
 12 (.)
 13 Mum ↑Well they don't seem t'mind, °hm°
 14 (.)
 15 Les .tch uh Don' take ↑you home though ↑do they.
 16 Mum →nuh ↑heh huh
 17 (.)

データ 1 では, Mum が Les に対して, 共通の知人についての complaint を述べているが, それに対して Les は affiliative な反応をしていない。8 行目において Les は imposition という強い言葉でくだんの知人のふるまいを糾しているが, それについて Mum は少しの間をおいて聞き返し (10 行目), ついで “They don't seem t'mind” という消極的な答えを返している (13 行目)。問題になっている笑いはこの直後の 15 行目の, Les の付加疑問文を用いた発話に対する応答に用いられている 16 行目。16 行目については次のようなことが指摘できる。まず, 15 行目は yes/no で答えることが規範的な疑問文であるにもかかわらず, そのどちらでも答えていない。その意味で十分に alignment していない応答である。また, 15 行目においては complaint への同意が求められていると考えられるが, それに同意も不同意も示していない。すなわち, はっきりと不同意を示しているのではないが, はっきりと同意もしていない。こうした仕方の反応は一般に, 「同意ではない」ということ, すなわち affiliate していないということを示在化する (Pomerantz 1984, Schegloff 2007, Pomerantz and Heritage 2012)。つまり 16 行目は十分に alignment も affiliation もしていない応答であるということが出来る。このことから, 聴き手はこれ以上 complaint を展開させず, 終結に向かわせるようにふるまっているという分析がなされている。

一方, 本研究で扱うデータでは, これとは異なる仕方で笑いが用いられている。のちに見るように, 本研究で扱う事例は, complaint の語りの中で, その complaint の根拠として語られ

ているエピソードや事態を語る上で、それがあたかも「面白い話」であるかのように語られ、それに対して聴き手が笑って反応する、というようにまとめられるようなものである。こうした事例においては、あくまで聴き手は語り手の発話のデザインに align しており、そして語りの展開を共同で支えていると考えられる。そのような聴き手としてのふるまいとして見たとき、complaint の語り（の一部）に対して笑うというのはどのようなふるまいとして見ることができるのか。本研究の問題はこの点である。

3. データと方法論

本研究で扱うデータは、国立国語研究所において構築が進められている『日本語日常会話コーパス (CEJC)』(小磯ほか 2020) である。CEJC は日常生活における会話の多様性をできるだけ反映し、さまざまな研究に利用可能な形で提供するため、音声および映像と文字起こしテキストを利用可能な形で提供するほか、以下のような特徴を備えるよう設計されている。

- **大規模**：200 時間分の会話データ（完成時、モニター公開版は 50 時間）
- **代表性**：年齢・性別・属性・会話の種類の種類を考慮
- **検索性**：形態論情報（品詞、文中の位置、発話時間など）

上記の自然会話データについて、会話分析 conversation analysis (Sacks et al. 1974, Schegloff 2007) の方法論にもとづく分析を行う。会話分析とは、「人が日常生活の中で従事する多種多様な実践的諸活動——会話、会議、診察、面接、ゲーム、授業、接客等々——を構成する出来事や人びとの振る舞いが、いかにしてその場で常識的に合理的な理解可能性を備えるものとして成立しているか、この秩序を産出するための社会成員の「方法」(Garfinkel 1967) を、発話をはじめとする相互行為中の振る舞いの観察を通じて明らかにする」方法論である (平本 2018)。我々はやりとりを行いながら日常のさまざまな活動を行なっている。そうした活動の中のやりとりに用いられることばや身振りなどのふるまいは、すべてがそうではないにせよ、その活動を構成するひとつひとつの行為や活動全体を成り立たせるための参加者の指し手になっているものを含んでいる。会話分析が採用する分析方針は、どのようにしてそうしたふるまいが行為を構成する指し手になっているのかを明らかにすることである。

4. 分析

本節では、complaint の語りがなされている会話から、主に語りの聴き手が笑っている場面をいくつか取り上げ、詳細に検討する。なお以降の分析において、語り手が complaint において糾弾している第三者のことを「対象」という語で指す。

まず、データ 2 とデータ 3 は同じ一続きの complaint の語りの一部である。A は学校などでワークショップなどを行う NPO 団体を主宰しており、語りの中で言及されている「授業」というのはある高校の授業の一環として A の団体が行なったワークショップを指している。A が語っている complaint は、その団体の後輩にあたる構成員が不適格であるということを述べているものである。

データ 2 の冒頭部分では、complaint の一部として、具体的に complaint の対象の構成員がどのような行動をとったかという事例を挙げ (1 行目)、それについて A がどう思ったかとい

データ 2 [会話 ID: T010_013 2105.395 秒-2115.279 秒]

- 1 A わたし こんなことしました では きょうの授業は みたいな。 =
 2 A =>¥いやいやいやいや¥ [じゃんく。 =
 3→ B [ahaha[hahahahaha
 4 A =[¥そこ振るだろ¥ みたいな。 =
 5 B =待て 待てっ [て。
 6 A [¥神崎どうだった 正月: ¥ み [たいな。
 7 B [報告か。
 8 A [そう。
 9 B [報告じゃねえん [だからね。
 10 A [ほ h う h こ h [く h す h るの みたいな。
 11 B [(huhuhu) hahahaha
 12 A いらん いらんみ [たいな。
 13 B [hahaha

うことを述べている (2 行目)。1 行目までの部分で語られた事例は、ワークショップの開始にあたって、対象の構成員が自分が最近したことを話ただけで、生徒に話させることをせずに導入部を終わらせたというもので、1 行目はその事例の内容を端的にまとめて提示し直しているものである。B の笑いが生じているのはその直後の 3 行目である。

3 行目の笑いは直前の 2 行目への反応としてなされている。図 1 に示したように、2 行目は笑いとジェスチャーを伴い、かつ速く発話されている。ここでのジェスチャーはなにかを形象するものではなく、いわゆるビートという、一連の発話の中でその位置を強調するために用いられるものである (Wang and Chu 2013)。A の笑いは、その位置の発話が笑いによって応答することが適切であることを示している (Jefferson 1979)。また強調的な発話デザインや身体動作を用いていることも、この位置がそこまで語られた事例において強く反応すべき箇所であることを理解可能にしている。このことから、3 行目の笑いは、直前までの語りの組み立てに協調して発されたものであるといえる。



図 1 データ 2 の 2 行目付近の参加者の様子

では、2 行目と 3 行目において、語り手が笑いを誘発し、それに応じて聴き手が笑うことで、

両者は共同して何を達成しているのだろうか。3行目の笑いは直前の発話の組み立てに合わせたものであり、かつ強い反応が適切な位置でなされた共感的反応である。その位置とは、対象となる構成員の行動が事例として語られていた一連の発話の直後である。その位置での笑いが適切になることで、complaint そのものは笑えるような性質のものではないとしても、その過程で起こった出来事は笑える／笑うべきもの (laughables, Glenn 2003) として扱うことが可能になる。常に笑いが affiliative であるわけではない (Glenn 2003, Holt 2012) が、笑わせる → 笑うという連鎖における笑いは affiliative なものであると評価できるだろう。したがって、事例を面白いものとして提示することにより、complaint の語りのさなかにあっても、語り手が affiliative なふるまいが適切な場所を作り、聴き手がそれに応じることで、affiliative に complaint を組み立てることが共同で行われているといえる。さらに、それが事例の直後であることで、complaint そのもの、あるいはその不満を笑っていることにはならない位置での笑いになっている。

また、対象の行動とそれに対する語り手の仮想的な反応は、「対象の（驚くべき）不適切な行動」と、それに対する「自身の常識的な驚き」という対比になっている。笑いはこうしたギャップによる面白さを理解したことの表示でありうる (Raskin 1985, 小泉 1997)。したがって、笑いがその対比への賛同を直ちに示すわけではないが、少なくともその対比を理解したことは表出されていると考えられる。

さらに、affiliation が complaint の語りの途上で確立されることにより、complaint における不満への態度をより明瞭に、強く表出することが容易／安全になると考えられる。データ 2 を見ても、2行目において A が事例についての態度を表出し、それについて B が3行目の笑いを発したあと、4行目以降では事例の中での対象のふるまいを共同で批判している。これは complaint の展開について論じた Drew and Walker (2009) が escalation と呼ぶ、complaint において対象への不満を徐々に明瞭に表出していくことに似ている。しかし、escalation と同様だとすると、escalate されているのは不満の語りのはずで、それが聴き手によって笑われていることになるとも思われる。これについては、事例を不満のエビデンスとして提示し、あくまでその中の対象のふるまいを笑っているという組み立てになっているため、事例への態度を笑いながら表出しても不満そのものをいわば「笑って済ませて」いることにはならないと考えられる。

データ 3 [会話 ID: T010_013 2050.406 秒-2057.472 秒]

- 1 A 印象です 笑顔大事ってゆう授業でめっちゃがちがちにしゃべったの。
- 2 B *ahahahaha ((声は聞こえない笑い)) hah
*((手を数回叩く))
- 3 B おま h え h[って感じだよね。
- 4 A [はあ?[みたいな。
- 5 B [hhhhahahahaha

ほかにもいくつか断片を見てみたい。データ 3 の 1 行目ではデータ 2 と同様に AB 両者が笑っていることがわかるほか、対象のふるまいを極端な形 (Pomerantz 1986) で描写しており、強い反応を呼び込む強調がなされているといえる。ここでもデータ 2 と同様の手段によって聴

き手の笑いを適切にし、affiliative な complaint の語りを組み立てているといえる。

データ 4 とデータ 5 は、データ 2 およびデータ 3 とは別の参加者による別の会話の一部である。ここでは A の会社の再雇用職員が、激減した給料に文句を言って十分な仕事をしないという内容が語られている。A はそうした十分な仕事をしない職員に対処しなくてはならない職責を負っている。

データ 4 [会話 ID: C002_016 1650.734 秒-1659.131 秒]

- 1 A でも そんな そんなに少ない賃金で働いてんだぞ 俺 みたいな。
- 2 A <知らない>って。
- 3 B huhuhu

データ 5 [会話 ID: C002_016 1713.726 秒-1720.318 秒]

- 1 A それは僕 もう 仕事したくないってゆうか それ それは僕じゃなくていいですよね みたいな
- 2 か [んじ。
- 3 B [huh huh huh huh
- 4 A *おい おいみたいな。
- 5 B *((繰り返し頷く))--
- 6 B ふ:::ん。
- 7 B (cont.)--((繰り返しのスピードが緩む))
- 8 A お前だろ みたいな。
- 9 B (cont.)-----

データ 4 の 1 行目およびデータ 5 の 1 行目、2 行目で提示されているのは、complaint の対象である再雇用職員の発話であると考えられるが、過去に当該の人物がこの通りの発話をしたのを引用しているというよりは、類似の状況下で習慣的にこの種のことを言っており、その例として 1 行目のような発話を示していると考えられる。complaint のエビデンスを laughable として提示する上で、具体的な特定の出来事である必要はなく、このように一定の条件下で習慣的に起こる事態も同様に用いられることがわかる。

データ 4 は、complaint のエビデンスが笑うべきものであるという理解は、主としてその直後の 2 行目の存在によって与えられていると考えられる。一方、データ 5 では、2 行目の直後の位置で笑いが生じている (3 行目) が、そのあとで語り手の反応を提示している 4 行目および 8 行目に対しては笑いが生じていない。一般に、なんらかの事態や出来事を語ったあと、それについての語り手の仮想的な反応を提示する連鎖においては、その直後は笑いによる反応が適切な位置になる (臼田 printinga,p) 場合が多いが、そうならないデータ 5 は例外的に見える。データ 5 に限って見れば、1 行目では、職場において従業員が「仕事したくない」「それは僕じゃなくていいですよね」といった発言をするという、立場に相応しない怠惰な行動をとるという事態が述べられており、立場と行動のギャップが笑うべき位置の理解に寄与していると考えられる (Raskin 1985)。一方、その事態の語りに対する語り手の反応である 4 行目および 8 行目の後の位置で笑わないのは、ここでの A の語り全体として complaint であり、かつ語られた事態は A が職責として対処しなくてはならない事態であるという理解による可能性がある。しかし、4 行目に B が 6 行目の「ふ:::ん」という反応をしたあと、もう一度、より

明瞭に1行目の発言の妥当性を否定して対象を譴責する反応を8行目においてやり直している
と見ることができるので、Aは4行目の直後の位置で笑いが不在であると理解している可能性
がある。笑いの位置の違いや笑いの有無が complaint の語りの構築にどう関わっているかにつ
いては、さらなる検討が必要である。

5. まとめ

本研究では、complaint の語りにおいて主に聴き手が笑うという連鎖を取り上げて、いくつ
かの断片を観察して分析した。本研究で取り上げた断片では、complaint の連鎖において、語
り手が complaint の対象に対して不満を抱くことが妥当であることがわかるエビデンスとし
て、対象の人物の行動のエピソードや傾向について話した後、それについて語り手がどう思っ
ているかを、その行動に対する仮想的な反応の形で示した後が、聴き手が典型的に笑う位置で
ある。その位置での笑いは、語り手が対象の行動をいわば「面白いもの／笑うべきもの」とし
て提示したことに応じてなされているものである。そのように、対象の行動を笑うべきもの
として提示し、それに応じて笑うことで、語り手と聴き手は affiliative な complaint の語りを
組み立てていると同時に、complaint 自体の語りを complaint としての地位を切り下げずに
(笑って済ませるといったことをせずに) 進行させる手続きになっていると考えられる。

謝 辞

本研究は国立国語研究所機関拠点型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づ
く話し言葉の多角的研究」(プロジェクトリーダー：小磯花絵教授)の研究成果である。また日
本学術振興会科学研究費交付金若手研究(B)「会話における対人関係の実証的研究：自然会話
データを用いて」(研究代表者：白田泰如，課題番号 17K13457)の助成を受けて行われた。

転記記号一覧

本文中で会話の転記に用いた記号を表1に示す。これらの記号は西阪(2008)に拠る。

文 献

- Trine Heinemann, and Véronique Traverso (2009). "Complaining in Interaction." *Journal of Pragmatics*, 41:12, pp. 2381–2384.
- Jack Sidnell, and Tanya Stivers (Eds.) (2012). *The Handbook of Conversation Analysis*. West Sussex: Wiley-Blackwell.
- Gail Jefferson (1988). "On the sequential organization of troubles talk in ordinary conversation." *Social Problems*, 35:4, p. 418–441.
- Gail Jefferson, and John R. E. Lee (1992). "The Rejection of advice: Managing the problematic convergence of a 'troubles-telling' and a 'service encounter'." Paul Drew, and John Heritage (Eds.), *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 521–548.
- Elizabeth Holt (2012). "Using laugh responses to defuse complaints." *Research on Lan-*

表1 転記記号一覧

| | |
|--------|-----------------------------------|
| [| 発話の重なる開始（重なるの終了が] によって示されることもある） |
| : | 直前の音が引き伸ばされている |
| = | 発話末と次の発話頭に付され、その二つの部分が隙間なくつながっている |
| - | 直前の語が途切れている |
| ? | 発話末が上がる音調 |
| ↕ | 発話末が上がって下がる音調 |
| ↓ | 直後の音調が下がっている |
| ↑ | 直後の音調が上がっている |
| (()) | 転記に表れない参加者の動作などについての転記者の注記 |
| 下線 | 強調されている |
| UC | アルファベットの場合、大文字での表記によって強調が示される |
| (発話) | 転記の際の聞き取りに自信がない |
| (.) | おおむね0.2秒に満たないわずかな間 |
| (数字) | おおむね括弧内の数字の秒数の間が空いている |
| > 発話 < | 記号に挟まれた発話の部分が相対的に速く発話されている |
| < 発話 > | 記号に挟まれた発話の部分が相対的に遅く発話されている |
| h | 呼気音（聞き取りに応じて他の子音が用いられることもある） |
| .h | 吸気音 |
| ¥発話¥ | 笑いの呼気は聞き取れないが、笑い声で発話されている |
| ° 発話° | 小さい声で発話されている |
| * | 身体動作などが発話と同時に行われている場合、その重なる時点 |

guage and Social Interaction, 45:4, p. 430–448.

Anita Pomerantz (1984). “Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/Dispreferred Turn Shapes.” J. Maxwell Atkinson, and John Heritage (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. Cambridge, U.K.: Cambridge University Press., Chap. 4 pp. 57–101.

Emanuel A. Schegloff (2007). *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.

Anita Pomerantz, and John Heritage (2012). “Preference.” Jack Sidnell, and Tanya Stivers (Eds.), *The Handbook of Conversation Analysis*. West Sussex: Wiley-Blackwell., Chap. 11 pp. 210–228.

小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉 (2020). 「『日本語日常会話コーパス』モニター版の設計・評価・予備的分析」 国立国語研究所論集, 18, pp. 17–33.

Harvey Sacks, Emanuel A. Schegloff, and Gail Jefferson (1974). “A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation.” *Language*, 50:4, pp. 696–735.

Harold Garfinkel (1967). *Studies in Ethnomethodology*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall Inc.

平本毅 (2018). 「会話分析の広がり」 平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実 (編)

- 『会話分析の広がり』 ひつじ書房, 東京 pp. 1–33.
- Lin Wang, and Mingyuan Chu (2013). “The role of beat gesture and pitch accent in semantic processing: An ERP study.” *Neuropsychologia*, 51, pp. 2843–2855.
- Gail Jefferson (1979). “A Technique for Inviting Laughter and Its Subsequent Acceptance/Declination.” George Psathas (Ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*. New York, London: Irvington. pp. 79–96.
- Phillip Glenn (2003). *Laughter in Interaction. Studies in Interactional Sociolinguistics*. New York: Cambridge University Press.
- Victor Raskin (1985). *Semantic mechanism of humor*. Dordrecht / Bolson / Lancaster: D. Reidel Publishing Company.
- 小泉保 (1997). 『ジョークとレトリックの語用論』 大修館書店, 東京.
- Paul Drew, and Traci Walker (2009). “Going too far: Complaining, escalating and disaffiliation.” *Journal of Pragmatics*, 41, pp. 2400–2414.
- Anita Pomerantz (1986). “Extreme case formulations: A way of legitimizing claims.” *Human Studies*, 9:2-3, p. 219–230.
- 白田泰如 (printinga). 「相互行為における引用標識「って」:連鎖とターンデザインに基づく検討」 日本語用論学会第22回大会発表論文集.
- 白田泰如 (printingb). 「態度をほのめかす例示:日本語引用表現「みたいな」の分析」 国立国語研究所論集.
- 西阪仰 (2008). 『分散する身体:エスノメソドロジ的相互行為分析の展開』 勁草書房, 東京.